

第31回 北陸地方ダム等管理フォローアップ委員会 議事要旨

1. 日 時 : 令和2年1月28日(火) 14:30~16:30
2. 場 所 : 東京八重洲ホール 901会議室
(東京都中央区日本橋3丁目4番13号 新第一ビル)
3. 出席者 : 辻本委員長、池本委員、関島委員、中田委員、中村委員、平林委員、柳原委員
4. 議 事
 - (1) 大町ダム定期報告書(案)について
 - (2) 北陸地方ダム年次報告書(案)について

(1) 大町ダム定期報告書（案）について

【総括】

平成26年度～平成30年度の調査結果の分析・評価をとりまとめた大町ダムの定期報告書（案）について、審議された。

その結果、治水・利水について適切な効果を発揮していること、環境への影響等についても、各種環境指標の状況に現状で問題ないことから、大町ダムについては適切に管理運用されていることが確認され、定期報告書（案）については了承された。

なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

1) 防災操作

- ・防災操作の効果は、下流河川の基準地点で適切に評価すべきである。

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

・濁度は、上流ダムの影響としているが、透視度が悪くなる傾向である。透視度と濁度に明確な相関性はないが、透視度も継続的な注視が必要である。

・藻類について、アオコや赤潮が発生していなくても、水質の変化が生じている可能性があるため、藻類について今後注視していく必要がある。

・富栄養レベルの評価で、経年変化を確認すると縦に上がっている方向に変化している（富栄養傾向）。ダムの回転率に変化が生じていないがリンが増加傾向であることから、上流ダムからの影響を強く受けるため、今後は調査結果を注視する必要がある。

5) 生物

・底生動物やカジカの評価は、河床環境と関連付けた考察が重要である。出水後の河床環境に着目して評価する必要がある。

・貯水池に生息するイタチハギ（外来種）は、群生、点在状況など分布を把握する管理が必要である。

6) 水源地域動態

・情報館への来場者数が減少傾向の年や増加傾向の年がある。要因を分析し、今後、来訪者を増やし、ダムの効果について適切に広報できるよう努める必要がある。

(2) 北陸地方ダム年次報告書(案)について

【総括】

大石ダム、手取川ダム、大町ダム、大川ダム、三国川ダム、宇奈月ダム、横川ダムの7ダムについて、平成30年度の管理・運用状況を取りまとめた北陸地方ダム年次報告書(案)について、報告された。

なお、委員会の審議に際し、各委員より出された主な意見等は下記のとおりである。

1) 防災操作

- ・なし

2) 利水

- ・なし

3) 堆砂

- ・なし

4) 水質

- ・富栄養レベルの経年変化を確認すると、縦に上がっている方向に変化しているのは(富栄養傾向)、手取川ダムと大町ダムであることから、今後は調査結果を注視していく必要がある。

5) 生物

- ・大川ダムのアレチウリの対策では植被率が大きく低下している要因について整理する必要がある。ダムの水位調節で減少したのであれば、その時期や発芽状況はどうか、というデータをしっかりと調査、分析する必要がある

6) 水源地域動態

- ・ダムの利用状況だけでなく、ダムの意義をきちんと説明した広報が必要である。宇奈月ダムのように、新たな機関との連携や、セルフプロデュースも含め、柔軟に考えて取り組んでほしい。